

ペイシェントボイスカフェ（子宮頸がん・人工肛門経験者）

普段はフォトグラファー・ライターとして活躍されている（9割は医療系取材）

『がんフォト・がんストーリー』代表

⇒企業や病院にて取材をしている

フォトグラファーではあるが

写真撮影のデバイスはiPhone（治療などによる体力の低下でカメラを持たず）

2013.5 子宮頸がん

2013.12 人工肛門となる

2014.5 人工肛門閉鎖

手術は4回 抗がん剤は5回

本当の始まりは

2013.1～

不正出血の症状のため病院で何度も検査

⇒そのたびに診断は「がんではない」

しかしある日突然

病院から電話があり

⇒「やっぱりがんだった」

初めは、『円錐切除術』→子宮を温存する形

しかしその後悪い知らせ・・・

『広汎子宮全摘』→卵巣・卵管・膣の一部までも摘出（医師との相談により1つの卵巣は温存）

*発見が遅れた理由

腫瘍を作らずに進行するタイプ（珍しい）

摘出後、私は

【女ではなくなるのか・・・！？】

⇒ご飯も食べられなくなった

【精神的には非常に重要な臓器】

⇒確かに、子宮や乳房がなくても生きていけるけれど・・・

抗がん剤＝恐怖心を生むもの

・タキソール

適応：卵巣癌・非小細胞肺癌・乳癌・胃癌・子宮体癌・食道癌

微小管蛋白重合を促進することにより微小管の安定化・過剰形成を引き起こし、紡錘体の機能を障害することにより細胞分裂を阻害して抗腫瘍活性を発揮する

・カルボプラチン

適応：肺小細胞癌・卵巣癌・子宮頸癌

癌細胞内のDNA鎖と結合し、DNA合成及びそれに引き続く癌細胞の分裂を阻害する

抗がん剤で非常に不安が強かった

⇒看護師などの医療者に相談（幸運にもすごく素晴らしい人たちで親身になって話を聞いて励ましてくれた。）

【頼れる医療者】の存在はすごく大きかった

抗がん剤の副作用について

多くの人にとって

辛い副作用の第一位は・・・脱毛

⇒しかし、演者自身は楽しめたとのこと

*薬学的には、副作用はなくすべきもの、副作用を軽減するために薬学的管理を実施する視点を持っている。副作用を楽しめたという観点は不思議だったが、そういった価値観も楽しく輝く人生のためには素晴らしいものだと感じた。

*ウィッグなどでおしゃれをすることで楽しむことができた

しかし

治療後1ヶ月後、突如としたお腹の激痛

⇒【絞扼性イレウス】

*壊死していた

手術を終えた時には・・・

人工肛門となっていた

医師より

「命に関わるものだった。手術に踏み切って良かった。人工肛門にしました。」

誰とも話したくなくなった（心を閉ざした）

しかし・・・

5日目の朝、突如【突然、もう大丈夫だ①】という気持ち・精神状態となった

*後述する演者の考えが、この精神状態の切り替えに繋がったのではないかと、考えた。

【人工肛門】

・意外と愉快なもの（腸が外に出ている状態、自分の意思に関係なく勝手に動いている）

⇒消化管は自律神経系支配『副交感神経支配』

*この感性には、正直驚いた。しかし自身を素晴らしく客観視しており、非常に状況が分かりやすい。

・一緒に困難に乗り越えた仲間

人工肛門でも出来ることを探した

⇒プール・ジョギング・温泉・ビキニを着ることなど

*重量挙げはできないですよ

⇒逆に他には普通でいられるのか、という意識になった

*【ブログ「ハッピーな療養生活のススメ」】

正直、人工肛門のお話しは聞いたことがあったけれど、詳細なことは知らなかった。

実際に経験談として、お話しを聞くことで大きな学びに繋がったし、今後同様の経験をされた患者さんに対しては生活指導やアドバイスに繋がっていきると感じる。

『父が薬剤師』

→製薬会社勤務だったため、薬剤師に抱くイメージは一般的なものだった（処方箋を渡すとお薬をくれる人）
取材の過程で、病院の裏側を見た。

- ・抗がん剤の調製（すごく手際の良いのに、こんなに時間が掛かるのか）
- ・薬剤暴露（カルボプラチンの瓶の向きを直したかったので、スタッフに伝えたら手袋を二重にして触れていた）
- ・病棟に薬剤師（何人つくのですか？→1人です）
- ・学会などで自己研鑽

⇒薬剤師・薬局は、以前に比べて変化しているのかもしれない

【薬をもらうだけではもったいない、薬剤師を味方にしてみよう】

薬ネタ

ポリフル：大きすぎて、非常に飲みづらい

タケプロン：イチゴ味（ココアで飲むとすごくおいしい）

デカドロン：名前が良い

プリンペラン：名前が良い

トランコロン：名前が良い

【薬剤師に期待すること】

- ・人と人とのつながり
- ・もっと存在感をアピールすべき

【がんフォト・がんストーリー】

でアピールするのも良い！？

患者や家族、医療者それぞれのがんに関わる立場・想いを写真にのせて投稿する

⇒『人の心を伝える』

ある病院での写真展

⇒薬剤師が関わりない（医師や看護師、栄養士などは関わりあるのに、どうして・・・？）

参加者より

『自分が、という主張はあまりなく、いつも謙遜』

『ポテンシャルはあるのに、やろうとしていない』

患者も薬剤師も

【もっと想いを知ってもらえたら良いのに】

①演者の考え

辛い思いが私だけのものではない

⇒辛い思いが、いつか誰かのためになる

感想

自分の疾患のこと、環境のことをここまで容観的に見つめることができるものなのかと驚いた。

一時は精神的にも落ちたのに、突如回復したというお話があった。元々、自分が辛い思いは、自分だけのものではなく、いつか誰かのためになるという思いがあったからこそ感じた。改めて、薬剤師の業務は裏側では疑義照会や調剤など頑張っていることが多いのに、表面では何ができるのか、何をしているのか知られていない。演者は取材を通して、薬剤師の職能を知ったが、自分たちのできることをもっと表出していくべきだと再認識した。これから薬局の機能、薬剤師の役割はまた変化していくことが予想される。参加者の一人から、薬剤師は、例えば「ランソプラゾール」の処方に対しては説明ができるが、お腹が痛いのですが、と相談があったときにはちゃんと話せる人がいないというお話があった。病識・薬識としては持っているはずなのに、知識の使い方やコミュニケーションを上手くとれない薬剤師が多いのも事実。薬剤師も一人の人間、医療者である前にまず人と人の繋がりを意識する中で、しっかり信頼関係を構築することが重要であると思う。

薬剤師として何ができるのか、「かかりつけ」という言葉が叫ばれる中で、自分の職能を活かせるように人との繋がりを改めて意識していきます。